

谷口吉生の美術館における設計手法の研究 —アプローチ空間の重層性について—

宇野研究室

4107070 武田 健太郎

1. 研究背景と目的

谷口吉生が手がけた建築（以下谷口建築）は、内部と外部の親和性^{註1)}が高く、アプローチ空間から諸室へと吸い込まれていく感覚が得られる。本論文ではこれを「内部と外部のゆるやかな連続性」によるものと定義する。この要因として、アプローチと庭との関係性、動線の分節の重層性が考えられる。そこで、この要因を明らかにすべく谷口吉生の設計手法を分析する。さらに、庭との関係性が豊かな数寄屋建築を比較対象とすることで日本独自の空間特性を分析し、現代建築にどう反映させているかを考察、分析する。

2. 研究対象と方法

2-1. 研究対象

谷口吉生建築作品集である『MUSEUMS OF YOSHIO TANIGUCHI』、『ja-YOSHIO TANIGUCHI』の2冊を参照し図面、写真が確認出来る20作品の中から、美術館建築である8作品を事例として研究を進める。また数寄屋建築からは桂離宮を事例とする。

2-2. 研究方法

事例は図面、写真および現地調査にもとづくデータから分析する。谷口吉生の美術館8作品において、アプローチ空間から展示空間を対象とし、庭との関係性に着目し類型化する。桂離宮では、中門～古書院一の間と古書院前庭～中書院一の間への動線を対象とする。類型化をもとに代表的な事例について要素を絞り設計手法の分析を行う。

3. 類型化

3-1. 図面、写真の分析

配置図、平面図から、庭とアプローチ動線の関係性について類型化する（図1）。また、平面において動線の回折の有無も調べる。

3-2. 庭側立面図の抽出、類型化

庭側立面図を読み取り、図示、類型化する（図2）。

3-3. 内部から庭への眺望分析

写真、図面から内部から庭への眺望の分析を行い、重層性の有無を確認する（図3）。

3-4. 考察

1節～3節の分類を1つの表にまとめ（表1）、以下の知見を得た。

- ・庭とアプローチ動線の関係は、①庭を通して内部に入

▼表1 分類表

事例	年代	庭の有無	アプローチ		庭への開口		眺望重層性の有無
			タイプ	回折有無	■	□	
資生堂アートハウス	1978	○	B	○	○		
土門拳記念館	1983	○	B	○	○		
長野県信濃美術館東山魁夷館	1990	○	C	○	○		○
丸亀市猪熊弦一郎美術館	1991	○	A	○	○		○
豊田市美術館	1995	○	A	○	○		○
東京国立博物館法隆寺宝物館	1999	○	A	○	○	○	○
香川県立東山魁夷せとうち美術館	2004	○	B	○	○		○
ニューヨーク近代美術館	2004	○	C	○	○	○	○
桂離宮 中門～古書院一の間	1600頃	○	A	○	○		
桂離宮 古書院前庭～中書院一の間	1600頃	○	B	○	○		

る、②庭を見ながら内部に入る、③内部に入って庭を見るの3種類に分類出来た。

- ・動線を回折させる共通点が挙げられる。
 - ・内部からの眺望では庭へ底や柱などを重層的に操作することで庭の風景に奥行きを与えていた。
- 以上より、空間体験における重層性を回折とレイヤーを成している構成要素に着目して詳しく分析していく。

4. アプローチ空間のアクソメ、垂直投象図による分析

4-1. 対象事例

重層性についてより深く考察するためにアプローチタイプAの丸亀市猪熊弦一郎美術館、豊田市美術館、東京国立博物館法隆寺宝物館、Bの土門拳記念館、Cの長野県信濃美術館東山魁夷館を事例として取り上げる。3章と同様桂離宮も対象事例とする。

4-2. 手順（図4）

- ①アプローチ動線の経路の抽出
- ②一定方向ごとのボリューム^{註2)}に抽出
- ③構成要素の抽出
- ④-1重層性を確認出来るボリュームの抽出
- ④-2垂直投象図^{註3)}、アクソメの抽出
- ⑤縦軸に回折深さ^{註4)}を、横軸に奥行き深さ^{註5)}をとり、ボリュームを積み重ねて図を作る。

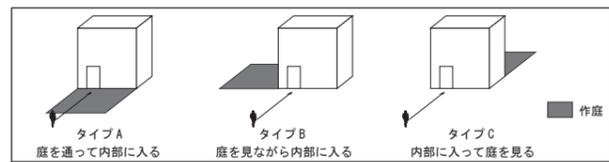
4-3. 構成要素の分析（図5）

本論では、空間体験に影響を与える要素を抽出するため、影響を与える構成要素を抽出する。構成要素は、①ルーフ（屋根）、②エンクロージャー（周壁）、③フロア（床）^{註6)}に分類出来る。重要な要素として、④庭も構成要素の中に入れる。

4-4. 重層の分析

4-4-1. 各事例におけるボリューム同士の関係性

直線型:取り出すボリュームの数は1つであり、奥行き深さは深い。直線上に、構成要素を配置しゆったりとした



▲図1 庭とアプローチ動線の分類



▲図2 庭に対する開口の分類



▲図3 内部から庭への見えの重層性

空間変化を作り出している。

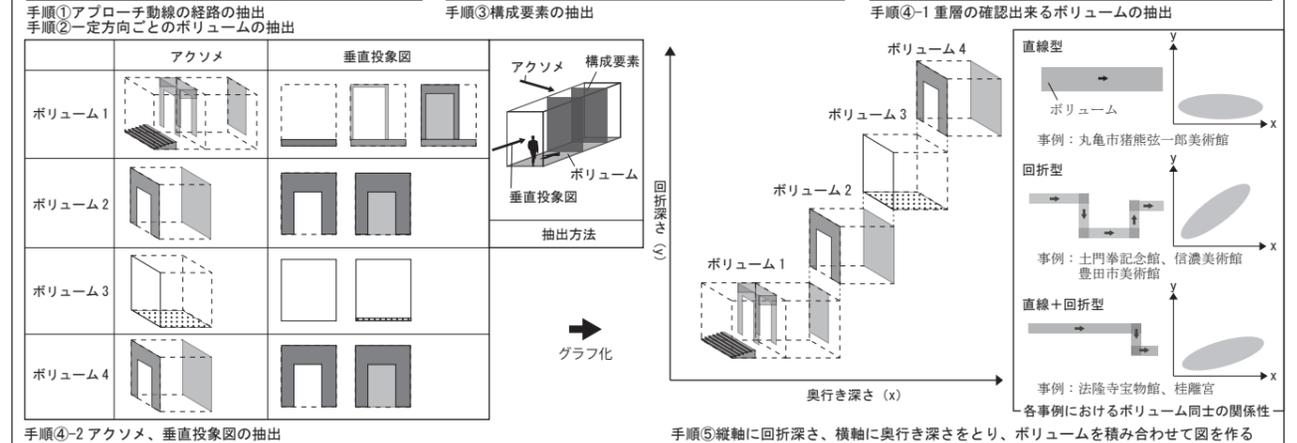
回折型:取り出すボリュームの数が複数であり、奥行き深さは浅い。ボリュームの関係性が方向転換を伴い回折して、複数の場面が連続していくことで空間の変化を作り出している。

直線+回折型:直線型と回折型の性格を持つ。回折型との差異は、1つのボリュームに5個以上の構成要素があれば直線型の性格も持つものと判断する。桂離宮がこれに該当する。

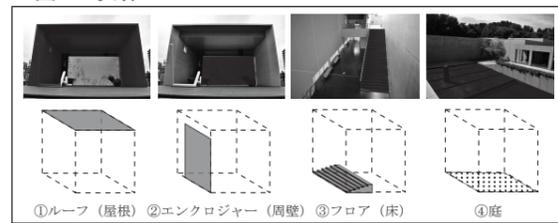
4-4-2. ボリュームの特徴（図6）

直線型:特徴①ルーフによる分節に加え、エンクロージャー、フロアでより細かく分節操作がされている。特徴②エントランスにおいて大きいスケールから小さいスケールに空間を変化させ、向かう空間を隠すようにエンクロージャーを配する。

回折型:特徴③正面に抜けを持つエンクロージャーを通過すると抜けの無いエンクロージャーが配され回折を促す。特徴④透明なエンクロージャーの奥に庭を配し眺望を切り取る。



▲図4 手順



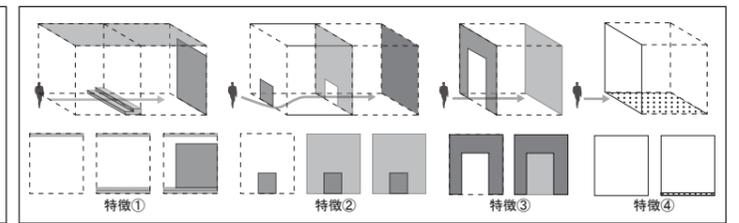
▲図5 構成要素の分類

桂離宮:特徴①③④は見受けられるが、特徴②は見受けられなかった。一方、桂離宮のみに見受けられる特徴としてエンクロージャーによる操作がある。襖を繰り返し、揃える、ずらすことで奥行き深さを作っていた。回折する際のエンクロージャーも襖を用いる特徴があり、その先の空間を見ながら回折することになる。

5. 結論

本研究では以下の知見が得られた。

- ・谷口建築においてアプローチ空間では、直線型、回折型、直線+回折型の3タイプの重層性が確認出来た。そのそれぞれのタイプにおいて、ゆるやかな連続性も異なる。
- ・谷口建築と桂離宮（数寄屋）を比較すると、重層性において類似点を見つけ出すことが出来る。一方、その重層性を作り出す構成要素において差異を見つけ出すことが出来る。特に、エンクロージャーによる操作に差異がみられる。その差異より、谷口建築では2次元+3次元的な操作を用いる一方、桂離宮では2次元的な操作を用いて重層性を作り出していることが明らかとなった。



▲図6 ボリュームの特徴

脚注: 1) 『日本の都市空間』中の「日本空間の特性のひとつとして空間性格の未決定性と他の親和性があげられる」から引用。2) 平面図の動線を一定の方向を持つ長方形の組み合わせで取り出した際の1つ。3) 対象と平行な垂直面と対象に向けた投射線が交差した軌跡を記した図。一般的に立面図を得る際に用いられる方法。4) 平面図から取り出せたボリュームのうち、重層性を持つボリュームの数と対応する。方向転換により切り替わる場面の数。5) 構成要素による分節の家。物理的距離ではない。6) 文献7)の「境界論」より引用。参考文献: 1) 『Yoshio Taniguchi: Nine Museums』2004 Museum of Modern Art 2) 『JA 21 谷口吉生』1996 新建築社 3) 「谷口吉生「丸亀市猪熊弦一郎現代美術館・図書館」—建築を見る（エスキスシリーズ）」古谷誠章 2001 彰国社 4) 『日本デザイン論 (SD 運書 5)』伊藤ていじ 1966 5) 『Katsura: Imperial Villa』磯崎新 2007 Phaidon Press 6) 『建築における日本のもの』磯崎新 2003 新潮社 7) 『空間-機能から様相へ』原広司 2007 岩波現代文庫